

【訳 註】

ホレス・ウォルポール 『我が生涯の覚書』

前 田 雅 晴

私は1717年9月24日、London St. James' 近くの Arlington Street で生まれた^(註1)。名付け親（名祖なおや）は Duke of Grafton の Charles Fitzroy、そして叔父の Horatio Walpole、代母は叔母で、Lady Viscountess Townshend（子爵未亡人）、Dorothy だった。

1724年 天然痘の予防接種^(註2)を受けた。

1725年 Lord Townshend の4人の息子である従兄弟たちと Kent の Bexley へ行った。チューターとして Edward Weston が同行したが、彼は Exeter の主教 Stephen Weston の息子たちの1人である。そして、そこには数ヶ月滞在した。次の夏には Middlesex の Twickenham で同様の教育的体験をした。その間冬には Lord Townshend の邸へ毎日出掛けて、Mr. Weston の指導を仰いだ。

1727年 4月26日 Eton 入学。そこでは同校校長 Dr. Henry Bland の長男（後に Durham の主教座聖堂名誉参事会員）、Henry Bland 氏が私のチューターで、後に Dean of Durham（Durham の執事）となり、Eton 校長となった。

1731年 5月27日 Lincoln's Inn^(註3)に入れられたが、父は私を法曹職につける積もりだった。しかし私はそこへは行かなかった。法曹職に興味がなかったからだ。

1734年 9月23日、Eton 卒業。1735年3月11日、Cambridge の King's College 入学。公的指導教官は Mr. John Smith、個人的には Mr. Anstey だった。後には Mr. John Whaley が私の指導教官だった。Trinity Hall の Dr. Dickens の民（事）法の講義に通った。短期間だったが、盲目の Professor Saunderson の数学の講義に通った。後に Mr. Trevigar が私に数学と哲学の講義をした。Dr. Battie の解剖学の講義を聴いた。私は Eton でフランス語を既に学んでいた。Cambridge で Signor Piazza のイタリア語を学んだ。家庭では舞踏と剣術（フェンシング）、そして皇太子及び皇太子妃の絵画の師であった Bernard Lens について絵を学んだ。

1736年 皇太子 Frederic の御結婚について短いラテン詩を1篇書き、Cambridge 大学の *Gratulatio* に発表された。

1737年 8月20日 母が死去。

直に父が私に税関の輸出入検査官の職を授けてくれたが、1738年1月29日には、William Townshend 閣下の部屋で私を Usher of the Exchequer（大蔵省式部官）に任命したので、その職（検査官）を辞した。そして私が丁年に達すると、大蔵省の、他に2つの特許関連の地位を与えられたが、それは Comptroller of the Pipe（大樽の液量検査官）と Clerk of the Estreats（罰金・科料・誓約保証金等の取り立て執行官）と呼ばれるものだった。それらの職は私の代わりに Mr. Fane によって占められていたものだった。

父の2番目の妻 Mrs. Maria Skerret が1738年6月に死去。

長い間隔をおいてではあるが、1738年終わりまで Cambridge に在籍、正式には1739年まで Cambridge を去らなかった。1739年3月10日、私は友人の Thomas Gray と旅に出て、Paris へ行った。2ヶ月程滞在した後、そこから私達は、私の従兄弟の Henry Conway^(註4) を伴って Champagne の Rheims へ行き、そこに3ヶ月滞在した。そして Geneva 近くを通過して、そこで Conway と別れ、Gray と私は Lyons を通過して、Alps を越えて、Turin まで行った。そしてそこから Genoa, Parma, Placentia, Modena, Bologna そして Florence を訪れた。私達は、主にイギリス公使 Mr. Horace Mann^(註5) の為にそこに3ヶ月滞在した。イタリア滞在中に Clement 12世が亡くなったので、新教皇の選挙を見物の為1740年3月末 Rome へ出掛けた。しかしコンクラーヴェ（教皇選挙秘密会議）が続き、暑くなってきたので、(Naples への遠足のあとで) 私達は6月に Florence にもどり、Mr. Horace Mann 邸に、続く1741年の5月までとどまった。1741年、私達は Reggio のフェア（博覧会）へ出掛けた。Gray はそこに私を残し、Mr. Francis Whithed と Mr. John Chute と共にキリスト昇天の祭りに Venice

へ出掛けた。私は Reggio で扁桃膿瘍にかかった。そして(苦しみから逃れるのに)5時間以上にわたり散々苦しんだ。

私は Earl of Lincoln の Henry Clinton と詩学教授 Joseph Spence と共に Venice へ出掛けた。そこに1ヶ月滞在した後、彼等と共に海路 Genoa から帰路へ、Antibes 上陸、そして Toulon を通って Marseilles、Aix、そして Languedoc から Montpellier、Toulouse、Orleans、そして Paris まで。そこで2人と別れて1741年9月12日 Dover 上陸、先の総選挙で Cornwall の Kellington 選出国議員に選ばれていたが、議会は20年以上続いた父の政権を終結させた。

1743年2月9日 父辞職、Earl of Orford^(註6)の位階を授かった。彼は大蔵省所有の Downing Street の邸を出て、Arlington Street の邸に引っ込んだが、私が生まれたのはその向かいの家であった。それは、現在 Mr. Pelham の邸の建て増しビルが建っている所である。

1742年3月23日 私は初めて下院で演説したが、父に関する秘密委員会(設置)動議に反対するものだった。この演説は雑誌に掲載されたが全く不正確で、演説文章の1段落が欠けていた。

7月14日 Mr. Mann 宛手紙^(註7)中に *The Lesson for Day* を書いた。それを書いている時に Lord Lovel の子息 Mr. Coke がやって来て写しをもっていき、出版される前に広めてしまった。しかし、いろいろと付け加わっていた。その種の、夥しい物のオリジナルだった。

1742年夏 私は引退した父の気晴らしにと、*Sermon on Painting* を書いた。それは彼の礼拝堂付き牧師により説教された。Houghton に近い Stanno の私の長兄の前でもう1度説教された。そして後に *Aedes Walpalianae* に掲載された。

1743年6月18日 *Old England, or the Constitutional Journal* という週刊誌に、*The Dear Witches* という、Macbeth 中の幾シーンかについての私のパロディが印刷されたが、新内閣に対する冷やかしだった。

同年夏 Fontaine を模した物語、*Patapan*^(註8)、*or the Little White Dog* を書いたが、これは印刷されなかった。

1743年10月22日 Lord Bath を嘲笑する為に私が書いた *Old England* #38 が出版された。それは他の3つの雑誌に再印刷された。

1744年夏 私は、Corneille の *Cinna* 中の1シーンのパロディを書いた。対話者は、Mr. Pelham、Mr. Arundel そして Mr. Selwyn だ。

1745年3月28日 父死去^(註9)。父は私に、彼が亡くなった Arlington Street の邸と、(現金) £5,000、税関の徴収官職としての年 £1,000、Edward と私とで折半のプラスアルファを遺してくれた。

1746年4月12日 *The Museum* 誌にて、*Scheme for Tax on Message Cards and Notes* を発表。直後に、1741年 Florence で書き上げていた *An Advertisement of a pretended new book* を出版。

同年(1746年)7月 *The Beauties* 執筆。この作品は活字になるまで極めて不当な扱いを受けた。

8月 Windsor 城近くに屋敷を入手。

11月4、5日 Mrs. Pritchard^(註10) が、反乱^(註11)鎮圧に際し、Covent Garden で演じられた *Tamerlane* の私の手になる前口上を述べた。これは翌日 Dodsley により印刷された。

同じ頃 Lucan (Lucanus) 第1巻の数行を訳していたが、これは活字にはならなかった。

1747年 Houghton のコレクション記事を印刷、タイトルは *Aedes Walpalianae*。それは1743年に作成されていた。200部のみ印刷して配った。極めて不正確なものだったので、1752年3月10日、より正確で増補した版を出版した。

1747年5月 Twickenham 近郊に7年契約で小さな屋敷を入手。後、未成年者所有のその屋敷を法に則して購入。様々に増改築、手を入れた。私が求め得たその屋敷に Strawberry Hill と名づけた。

この年(1747年)、翌年そして1749年、*Old England, or the Broad-bottom Journal* という週刊誌に13篇書いた。しかし名無しで印刷屋へ(原稿を)送られたので、ひどくゆがめられ台無しにされ出版された。新議事に Cornwall の Kellington 選出の議員として再選。同じ頃、当時私が信じていた通り、Mr. George Lyttelton^(註12)の手になる *Letter to the Tories* 出版、彼は、自分の一族と共に Mr. Pelham^(註13)の味方について。Mr. Lyttelton は、私の父の敵で父に反対する文章を書いていたこと、そして Mr. Pelham は、私の父とその仲間を手ひどく扱い、Tories の機嫌をとり Whigs を無視し

たので、私はその文書への返答を出版。(タイトルは) *Letter to the Whigs* というものだった。それは軽率な行為で、5日間で書き上げたものだった。年末私は Whigs 宛に更に2通の書簡を書いた。しかし翌年4月まで出版しなかった。出版と同時にたちまち版を重ね3版となった。私は出版中止にする積りだったが、父の親友 Lord Chief Justice (高等法院王座部長官) Willes に対する攻撃が Grenville^(註14) 一家により行われ、特に巡回裁判地を Ailesbury から Buckingham に移す法律を勝ちとったことで攻撃が行われていたので、それら(の文書)も含め幾つかの文書を出版した。

同じ頃、私は下院議長 Onslow 氏と派手な喧嘩をした。例の法案が修正事項付きで上院(貴族院)から差しもどされた。高等法院王座部長官の友人達は再びその法案に反対することにした。Potter 氏は彼を支援するよう私に求めた。彼は立ち上がったが、しかし、その法案の利点を論ずるにあたって、T. Townshend 氏と私の(叔父) Horace Walpole 氏が(私を阻止する為に)、法案の修正事項以外には論ずるようなことは何もない、と主張した。議長がこれを支持したので、私は Potter 氏を支援する積りだったとの見解を述べた。しかし他の連中の如何にもものわかった風な不平不満に屈する積りはないが、神託のような議長の決定には従うべきなのだ。議長は激怒し、議会(下院)に不満を表明した。私は陳謝したが、彼の意見を甘受することが、彼の感情を害することになるとは考えもしなかった。その法案について論議中、William Stanhope 卿^(註15) は、Grenville 一派への激しい反対演説中同様に(演説の)腰を折られた。私が行う積りだった演説の一部を Wm Stanhope 卿のものにして、彼の名前で出版した。それで大騒ぎとなった。Campbell が書店主に代わって(それに)答えた。私は Campbell への返答として、*The Speech of Richard Whiteliver* というもう一つ別の(演説)文書を出版した。こうした事は全て、連中が父に反対した程度を考えれば許容範囲である。いや、当時でもそれは許されない。

1748年 Dodsley^(註16) により出版された *Miscellaneous Poems* に私の作品が3つ入っている。*Epistle to Mr. Ashton from Florence* (1740年作)、*The Beauties* そして *Epilogue to Tamerlane* の3作品である。

次に、*Remembrancer* に2つ、それから1749年同誌に更に2つ作品を書いた。また同年後半に、宮廷の花火について詩作をした。それらは印刷されなかった。同じ頃、*Delenda est Oxonia* という小冊子を書いた。それは、大学(Oxford 大学)の自由を主張するものだったが、内閣が国王に Oxford 大学学長の指名権を与えることで、同大学攻撃の計画を抱いていたのだ。この作品は

(私は自作で最高のものの一つと考えているが)印刷屋で差し押さえられ、発禁となった。

1749年11月初めのある夜、私は10時頃 月明かりを頼りに Holland House から帰宅中、Hyde Park で2人の強盗に襲われた^(註17)。彼らのうちの1人が突然ピストルを発射し、私の目の下の皮膚を裂いた。そして顔に撃たれた跡を残した。私は気絶してしまった。ピストルの弾丸が2輪馬車の天井を貫通。それで、もしも私がほんの少し(1センチでも)左寄りに座っていたら、私の頭を撃ち抜いていただろう。

1751年 1月11日 国会開会の国王スピーチに際し、国王へのご挨拶の言葉を提議。

1751年 3月20日 長兄で Earl of Orford の Robert 死去。

この頃 *Memoirs* を書き始める。始めは、1年間の記録を書く積りだった。

同じ頃 一家に大喧嘩が起こった。友人の Chute 氏が大金持ちの後とり娘 Nicoll 嬢と婚約していたが、彼女の後見人達から逃れる為で、彼等が彼女を手ひどく扱っていたのだ。それで彼は、Nicoll 嬢に甥の Lord Orford と結婚するよう提案、ところが Orford は、彼女が£150,000以上の財産もちにもかかわらず拒否した。私はこの(件の)全貌(全容)について詳細に書いた。またこの年、私は、Fontaine の寓話に倣って *The Funeral of the Lioness* を書いた。

1752年 Sir Hans Sloane^(註18) の遺言により、彼の財産保管人の1人に任命された。

1753年 2月8日 E. Moore が発行していた *World* という季刊誌に書いた文書が出版された。私は、その時には印刷されなかった2編の他に8編書いた。1編には Mr. Fox という人物が登場するが、これは数年前に書いたものだった。

この年 *Six Poems of Mr. Gray, with Prints from Designs of Mr. R. Bentley* の申し分のない版を出版。

11月 *The Judgement of Solomon* というパーレスク詩を書いた。

12月 母の兄弟で最後の、そして最も年下の Erasmus Shorter, Esq. が死去。彼は遺言を書かなかったので、彼の遺産3,000ポンドは、弟の Sir. Edward と私、そして従兄弟の Francis, Henry Seymour Conway、そして

Anne Seymour Conway との間で均等に配分された。

1754年 新しい国会(議会)で、Norfolk の Castlerising から選出された。この年の7月、*The Entail* という寓話を散文で書く。同じ頃私は Westminster Abbey に、母の為の碑を建てたが、数年前 Rome の Valory に、母の像を製作してもらっていた。台座は Rysbrach の手になるものである。

1755年 3月 下院の競争選挙で、甥の Lord Orford から手ひどい扱いを受けた。これについて私は、私の政治活動について説明を付した長文の手紙を彼に書いた。

1757年 2月 私は、Lynn から選出されるべく、Castlerising の議席を明け渡した。同じ頃、不運な Admiral Byng^(註 19) を救う為に最善を尽くしたが無駄に終わった。

同年5月12日 1時間半弱で *Letter from Xo Ho* を書き上げた。(5月)17日に出版。直ちに5版重ねた。

6月10日 Charles 1世の絵画コレクションのカタログを出版。これに一寸した緒言を書いた。後に、(同様に) James 2世と Duke of Buckingham の絵画コレクションのカタログに、同様にして手短な序文乃至宣伝文を書いた。

6月25日 私は Strawberry Hill の自宅に印刷機を据えた。

8月8日 *Two Odes by Mr. Gray* を出版。私の印刷機による最初の作品である。

9月 King of Corsica の Theodore の為に、Soho の St. Anne's Churchyard に墓を建立。

1757年 10月 Bentley 氏翻訳の Hentznerus の版本を私の印刷所で完成。それに宣伝文を書いた。私はその版本を Society of Antiquaries に献呈したが、Royal Society 会員であると同時にその協会の会員でもある。

1758年 4月 私の *Catalogue of Royal and Noble Authors* の1刷完了。前年の1757年、5カ月足らずで書き上げたものだった。同じ頃 Mrs. Porter が Lord Hyde の劇作品を出版、これに私が宣伝文を書いた。

1758年夏 私の *Fugitive Pieces* を幾つか印刷。そしてそれらを従兄弟の General Conway に献呈。秋頃 Kent 州 Linton に友人の Galfridus Mann の墓を建てた。Mr.

Bentley のデザインである。10月初め、Lord Whitworth の *Account of Russia* を出版、それに宣伝文を書いた。

11月22日 Mr. Bentley の *Reflections on the different Ideas of the French and English in regard to Cruelty* という小冊子を出版。それは、(私が熟慮したものだが) 絶え間のない債務超過に関する法案を通過させようと企画されたものだった。私が献辞を書いた。Strawberry Hill では印刷されなかった。

12月5日 私の *Catalogue of Royal and Noble Authors* 第2版が出版。2千部が刷られたが、Strawberry Hill で印刷したものではない。その作品に関して *Critical Review* では散々酷評されたが、*Monthly Review* ではずっと穏やかな論評だった。Stuart 王家嫌い故の、前者 *Critical Review* の酷評であり、私の父への好意故の、後者 *Monthly Review* による穏やかな論評という次第。私見を変える見込みなし。引き続き2月の *Gentleman's Magazine* で、また酷い論評。しかし余りに馬鹿馬鹿しいもので、私の本の一部が斜字体で印刷され駄洒落にされている。私の本は、Francis 1世のことをフランス王という称号で記していないという理由から、理解しにくいと批判された。

1759年 2月2日 私は Mr. Spence の *Parallel of Magliabecchi and Mr. Hill, Tailor of Buckingham* を出版。後者の、貧しい Mr. Hill の為に一寸した額の金を集めようと計画したものだ。600部が2週間で売れた。それでロンドンで増刷された。

2月10日 ある匿名の著者 (Dr. Hillと言われたが、私自身特定できなかった) の *Observations on the Account given of the Catalogue of Royal and Noble Authors of England, & c., in the Critical Review, No.35, for Dec. 1758, where the unwarrantable liberties taken with that work, and the honourable author of it, are examined and exposed* というパンフレットを出版。私に関するこの弁護はお世辞たらたらで、すっかり不快になって、それに反対だとの私見を公にし、その著者を無視しようとしたが、友人達によって思いとどまらされた。

3月17日 私は *Fugitive Pieces* の幾冊かの配送を始めしたが、Strawberry Hill で収集・選別の上印刷され、そして General Conway に献呈されたものである。

5月5日 *Remarks on Mr. Walpole's Catalogue of Royal and Noble Authors; & c., in which many of his censures and arguments are examined and disproved; his false principles are confuted, and true*

ones established ; several material facts are set in a true light ; and the characters and conduct of several crowned heads, and others, are vindicated. Part the first という小冊子を出版。そして数日中に *Walpolian Principles exposed and confuted* が出版になるだろうと宣伝。それは、外科医だった Carter という人物により書かれたもので、彼は Manchester の英国国教会執事 (Deacon) の娘と結婚していたが、先の反乱で絞首刑にされた。この Carter、彼のものだったはずの 1 年 800 ポンド (収益のある) の土地を没収されていたが、自分の主義を放棄というよりも宣誓拒否説教者となった。また彼は、その背信的な行動や郵便物運搬日の夜毎に送っていた 15、6 通の手紙の所為で、先頃下宿していた菓種屋から追い出されていた。その家の人たちは、その手紙が穏やかならぬ目的の為に書かれていたと疑っていたのだ。彼の意図が何であったにせよ、大きな悪事を働くには思慮分別が足りなかったし、また判断力にも欠けていた。彼の書いた本は、Jacobites 主義の熱狂的文章で、その文体と手法から一層馬鹿馬鹿しいものになってしまい、この上なく下品なものになり下がっていた。彼より賢明な敵、或いは、横暴でより有能な唱道者が現れないことを願う！この Carter がビラを配って、各戸の入口において、回答を約束、それへの助力を求めていたのは注目に値する。5 月にはまた *Critical Review* に、ある匿名人物からその著作者達への手紙が掲載。私の *Catalogue* 中の Duke of Wharton の生涯に関する事実、Serjeant Wynne が Bishop Atterbury の演説を借用利用したという事を否定したが、それは絶対に真実だった。(Atterbury) 主教の孫にあたる Morrice 氏は、しばしばそれについて Selwyn 氏に語っていた。Fox 氏は Oxford 在学中だったが、その事を憶えていた。そして (Baptist 派の) Leveson Gower 氏は、完璧にそれを記憶していると言う。そして彼の (当時の) 一派は、その事で彼を賞賛する振りをしてみせた。彼はその御蔭で初年度 3,000 ポンドを手にした。ところが名声を保持するだけのものをもっていなかった (評判倒れだった) 故に、彼を解雇せざるを得なかった。実際、私が問題のその部分を書いた時、Wynne 氏が未だに生存中とは知らなかった。私を挑発するような事を何もしていない人物を憤慨させてしまって申し訳ないと思う。従って、さらなる屈辱 (とはいえ初めのもその積もりではなかったが) を与えることを避ける為に応酬しないことにした。

8 月には *The Parish Register of Twickenham* という詩を書いた。それはそこに住む著名な人々一覧である。

9 月 1 日 私は Vertue 氏^(註 20) の原稿を調べ始めたが、イギリス人画家列伝を書く為に、昨年 100 ポンドで購入したものである。

9 月 21 日 Lady Townshend に、Ticonderoga で殺された彼女の末息子の為の墓碑銘とデザインとを渡したが、(結果的には) 両方とも用いられなかった。

10 月 28 日 *Memoirs* の第 8 巻目完成。

10 月 29 日 臘画の新発見についての解説開始。それは Caylus 伯爵 (Comte de Caylus) により Paris で発明、ここ (Strawberry Hill) で Müntz 氏^(註 21) により改良された。

11 月 12 日 Müntz 氏を解雇。彼が辞めたので、新しい臘画法の解説出版の計画を棚上げした。

1760 年 1 月 1 日 Vertue の原稿を基にしたイギリス画家列伝を開始 (*Anecdotes of Painting, & c.* のこと)。同じ頃、Sir Charles Hambury Williams の碑を Westminster Abbey に建てる計画があって、私とその碑名を書いた。

3 月 13 日 *Dialogue between Two Great Ladies* を書く。それは G. Sackville 卿^(註 22) と Ferrers 卿^(註 23) の裁判が終わるまで引きのばされて、4 月 23 日に出版された。

4 月 この月、Oxford, Christchurch で Beauchamp 卿への儀礼に *Destruction of the French Navy* についての詩を書いた。

8 月 14 日 *Anecdotes of Painting in England* 第 1 巻を脱稿。

9 月 5 日 第 2 巻を起稿。

10 月 23 日 第 2 巻脱稿。

1761 年 1 月 4 日 第 3 巻起稿。

3 月 遺言で Edgcumbe 卿 Richard により Mrs. Day の管財人に任命された。

5 月 30 日 最近 Lady Mary Coke^(註 24) が病気だった為に、国王御誕生祝賀行きを思いとどまらせる為の戯れ説教^(註 25) を書いた。

6 月 11 日 外国へ行く Grafton 公爵夫人^(註 26) について寸鉄詩を書いた^(註 27)。

6 月 29 日 *Anecdotes of Painting* 第 3 巻を再開。起稿 1 日後に棚上げしていたものだ。

7月16日 *The Garland* を書いたが、これは国王についての詩作である。そしてそれを Lady Bute^(註 28) に送ったが、私自身の手ではなくて、また(私の)名前も添えずに、作者が私だと明かしもしなかった。

8月22日 *Anecdotes of Painting* の第3巻を脱稿。

1761年 12月20日 Lady Mary Coke の頬に聖アントニー熱の炎症が出ていることについて数行書く^(註 29)。

12月23日 彼の墓碑銘にと、Granville 卿の人物像を韻文にて書く。

3月24日 Society of Arts and Sciences (芸術・科学協会) の会員に選出された。

6月12日 *North Briton*^(註 30) という新しい週刊誌第2号で攻撃を受けた^(註 31)。*Catalogue of Royal and Noble Authors* の中で、私がスコットランド人におもねったと非難された。これには応酬しなかった。詔い以上に罪はないので何ら責められるはずはなかった。その部分はこの時期より5年前に書かれ出版されたが、この時期というのは前国王の治世で、スコットランドを偏愛しても宮廷では何のメリットもなかった。Bute 卿と懇意であってもそれで利することはほとんどないので、彼に手紙を書く機会は2、3度あったが、何か公職を求めようとしたり物欲しがったりしたことは全くなかった。私はこうした手紙の写し、そして Newcastle 公爵や Pitt 氏へのその他の手紙の写しを持っているが、同じく公平無私なものだ。この非難がなされる以前に Bute 卿は2度接見された。しかしその2回とも私は出席しなかったし、私の父の場合を除いて、どの大臣の接見の場にも出席していない。ただ1度だけ未だ私の父が権力の座にあった時に、Newcastle 公爵の接見に出席したことはあった。思うに *North Briton* の筆者は私以上に公職を求めようとしているのではないか。

8月2日 *Catalogue of Engravers* 起稿。

10月10日 脱稿。

Warburton 主教が、(私の) *Anecdotes of Painting* 第2巻の建築関連の章で何か憤慨しているということ、そして彼が Birmingham で印刷するよう提案していたのだが、Pope 氏作品の新版の中で私の事を攻撃しようとしたことを伝え聞いた。それを執筆中、彼の事を考えたこともなかったもので、彼が何を立腹したのか推量するのは難しい。その章をざっと読んでみて、彼がフェニキア人のことでナンセンスな事を書いていたのだと推断した。しかし、彼の作品はほとんど読んだことがないので、

私がそれをどこで見つけられるかを知るのとは不可能だった。私は、愚かしい気取り屋だと謂われなく怒らせるつもりはないし、文学的論争がどれほど馬鹿馬鹿しいものかわかっている積もりなので、Carlisle 主教 Dr. Charles Lyttelton に、私がフェニキア人について言った事が(彼の)立腹のもとなのかどうか尋ねて欲しいし、(私は)彼の事についてほとんど読んだことがない、それで彼のことを物笑いにしようなどと思ったことはない、彼に請けあって欲しい。私は Lyttelton 主教と名指しているが、それが Warburton 同様の尊大で馬鹿らしい彼自身の指示によったものでもなければ、彼の答に見られる程までに慢心(虚栄心)と愚劣振りを押し出せたなんて先ず信じてはいけないからだ。彼が答えた、「フェニキア人だって! いやいやとんでもない。彼は Pope (の) 版本中の私の註解のことを言っているんだ。その中でゴシック建築について言ったんだが、それについては語り尽くしてしまった」と。無礼で過剰な自惚れ具合については、唯次の様に述べておこう。もしも彼がほんの数行で様々な主題について言い尽くせるのなら、彼がとてつもなく長々と書き連ねるなんて全く不要なことだ、と。この後、ある孔雀、すなわち両親が美しいと思っている一人娘とやり合うことになる。孔雀も娘さんも主教もみな同じように救い難い。孔雀は気取って歩き、娘は甘やかされ放題のできそこないで、主教には理性がまったく役に立たない。

1763年 9月初めに Herbert 卿の *Life* の序文と献呈の辞を書いた。

1764年 5月29日 Conway 氏に反対のパンフレットへの返答を書き始めたが、パンフレットは *An Address to the Public on the late Dismission of a General Officer* というものである。返答は6月12日に書き終えたが、8月まで出版されなかった。タイトルは *A Counter Address to the Public, & c.* というもの。

6月 ゴシック物語 *The Castle of Otranto* 起稿、8月6日脱稿。

10月15日 Miss Hotham の為 に *The Magpie and her Brood* という寓話を書いた。Hotham 嬢、年齢は当時まもなく11才といったところで、Suffolk の伯爵未亡人 Henrietta Hobark の兄弟姉妹の孫娘である。それは Navarre の女王の部屋付き従者の手になる *Les Nouvelles Récréations de Bonaventure des Periers* から取られたものである。

12月24日 *The Castle of Otranto* 出版。500部。

1765年 4月11日 *The Castle of Otranto* 第2版、500部。

9月9日 Parisへ出発。

この年末 *Letter from the King of Prussia to Rousseau* を書いた。

1766年 4月22日 ParisからLondon到着。

6月28、29日 *Account of the Giants lately discovered* を書く。

8月25日に出版された。

8月18日 *Memoirs of the Reign of George the Third* 起稿。

1767年 2月1日 Strawberry Hillで、父の*Detection of the Testament Politique* 起稿。2月17日、再度 Strawberry Hillへ出掛けた折、脱稿。その虚構作品の英語への翻訳がなされなかったので印刷をしなかった。

3月13日 Lynnの市長に、再度国会議員になるつもりはないとの手紙^(註32)を書く。

この月、*The Castle of Otranto*のひどいフランス語訳、Parisで出版。

5月28日 私の、Lynn市長への手紙が初めて *St. James's Chronicle* に掲載された。

8月20日 Parisへ。そこで、Rousseau事件に関する私の懸念危惧するところを全て書いたが、差しあたって出版の意図はなかった。

9月 政治的悪態・毒舌について私が新聞に書いた2通の手紙が、*Public Advertiser*に掲載された。“Toby”と“A Constant Correspondent”の署名。

1768年 2月1日 *Historic Doubts on Richard the Third* 出版。私はそれを1767年冬に書き始め、夏の間も書き続け、Parisから帰国後書き終えた。1,200部印刷されたが、あっという間に完売、翌日新しく1,000部増刷、翌週出版された。

3月15日 *The Mysterious Mother* という悲劇脱稿。1766年12月25日書き始めたものである。しかしParisへ出掛けていた数ヶ月間（その原稿書きは）棚上げしていた。そしてその間は、*Historic Doubts on Richard the Third* を書いていた。最後の2幕は私が意図した通りには終わらなかった。

6月20日 *Historic Doubts* が欲しいと Voltaire からの手紙を受け取る。それと *The Castle of Otranto* を送った。彼に話してあったので、*Otranto* の序文は目にしたことがあるかもしれない。彼はそれを気に入らなかったが、自分の意見は通しつつも、大層丁寧な便りを受け取った。私は更に丁寧に返事を書いたが、論争になるのは構わないが、そのことには触れなかった。特に見解について、私達のどちらが正しくて、どちらが間違っているか論争になったら、全フランスが Voltaire 側に、全イングランドは私の味方につくだらう。

11月18日 彼女の息子Bristol伯爵、George William Hervey のたつての願いで、Hervey 夫人 Mary Lepelle の記念碑（の為）のエレジイ（哀歌調の詩）を書いた。その碑、Ickworth (Suffolk) の教会に建立されることになっている。

今年の国会解散に際して私は、Lynn市長に書き送っていた手紙の通り、再度国会議員にならないことにはしたが、私が書いた手紙は新聞に掲載された。

1769年 4月24日 Clive 夫人^(註33)が、舞台を退く彼女の為に私が書いた納めの口上を述べた。それは Robertson の *History of Charles the Fifth* にそれとなく触れたものだったが、その後出版された。

5月 David Hume 氏が、書記官室付きスイス人、Diverdun という人物を私に紹介してくれた。この人物が *Mémoires Littéraires de la Grande Bretagne* という書物を書いた。それで Hume 氏は（私が）彼に Herbert 卿の生涯を1冊上げるよう強く望んだ。そうすれば自分の日誌に引用出来るだろうから、と。（それで）そうした。4月にこの Diverdun が若いイギリス紳士と旅に出た。そして数日後、Diverdun から私への、1768年度の彼の“Memoirs”を、あるスイス人牧師が届けてくれた。彼は以前に1冊だけ *Mémoires* を出版したが、それは1767年度分である。この新しい日誌の中、（私の）*Historic Doubts* についての批評を見つけたが、Hume 氏による註が付けられていた。その批評家は、註はいいと断言している。Hume 氏は前年手稿による註を私に見せてくれた。が、Hume 氏が全く沈黙を守っていることに加えて、この行為は余りに卑劣であると思われたので、私は直にこれらの（Hume 氏の）註に対してだけでなく（私の）*Doubts* に批判的に書かれたその他諸々の事柄に対して応酬した。しかし、Hume 氏をそれ相応に厳しく扱ったので、私はこの応酬を印刷せずに、手稿のものを彼に見せるにとどめておこう、そしてその応酬を *Historic Doubts* の付録及び裏付けに残しておこうと決めた。

同じ頃 Voltaire が *Mercur*e 紙に、彼が私に書いた手

紙を出版した。しかし私は返答しなかった。というのも彼 (Voltaire) は Hume 氏以上に私を不当に扱ったからだ。私は彼とは少なからず行き来 (やり取り) があったが、その Voltaire が先ず自分の方から私に手紙を書き、私の本を所望しておきながら、Duchess of Choiseul に手紙を書いた。その中で、彼の方が最初に私に手紙を書いたことなど何も書かずに、差し出がましくも私が彼に私の著作を送ったということを、そして私が、道化役の Shakespeare を擁護して彼に宣戦布告した、と彼女に書いていた。Voltaire の私への返事では、彼は Shakespeare を大層賞賛している振りをしてみせたのだ。その公爵夫人が私に Voltaire の手紙を送ってくれたが、彼の率直でないところが不快極まるので、彼との交信を全て断った。

7月と8月に (私の) *Memoires* を更に2巻、1765年と1766年の分を書き終えた。

1770年 この年の夏に、*Richard the Third* についての Milles 博士の所見に返答した。

1771年 9月末 *Letters of King Edward the Sixth* への宣伝文を書いた。

1772年 (私の) *Memoirs* 脱稿、1771年で終わり。この先については日誌に書き続けていく積もり。この年、その前年そしてそれ以前に *Hieroglyphic Tales* を幾つか書く^(註34)。5つのみ。(私は) Antiquarian Society (古物研究協会) へ出向かなくなつて久しい。この夏、彼等(古物研究協会) が (私の) *Richard the Third* に批判的な、馬鹿馬鹿しい註釈を印刷しようとしたことを耳にした。彼等の最初の出版物には気づかなかつたが、彼等がとうとう私を怒らせて彼等の正体を暴かせるかもしれない、と考えた。従つて、先ず彼等と絶縁して古物研究協会を脱退して自由の身になろうと決めた。そして彼等は、現実でも市会に出席していたが、Foote が Whittington と彼の猫^(註35) 役で彼等を舞台にのぼらせた。私は、彼等がそれ程までに馬鹿げているとわかつてても気の毒とは思わなかつたし、彼等の馬鹿ぶりを書きとめることにも悪いとは思わない。そして、あのナンセンスぶりとそれに伴う馬鹿笑いを目の当たりにして、私は協会名簿から自分の名前を抹消した。7月末のことだった。

7月 私の版の *Miscellaneous Antiquities* 11号に *Life of Sir Thomas Wyat* を書いた。

9月16日 Duke of Gloucester が国王に、私の姪 Lady Waldegrave と結婚したことを報告。

9月貝殻のプレゼントを添えて Lady Anne Fitzpatrick に一筆書いた。

1773年 道徳的娯楽もの *Nature will Prevail* (1幕もの) を書いたが、その作品を匿名で Covent Garden 支配人 Colman 氏^(註36) に送った。彼はそれを大いに気に入ったが、「芝居」としては短すぎると考えて、それをもっと大きくふくらませるようにと強くすすめたが、この取るに足りない間に合わせの作に態々そこまで手をかける積もりはなかつた。

1774年 Chesterfield 卿の最初の3書信への序文と、そのパロディを書いた。

この年の始めに *Archaeologia* に、Masters 氏の所見に対する返答を書いた。7月、*The Three Vernons* について幾つか詩文を書く。

1775年 2月 *Braganza* の納めの口上を書いた。それから作者 Jephson 氏に悲劇に関して手紙を3通(書いた)。

1777年 4月 甥の Orford 卿が再度おかしくなった(気が狂った)ので私が面倒を見ていたが、彼の諸々の事に関して、私がよく思っていない弁護士を雇つたので、彼等の面倒をみる事を拒否した。

1778年 3月 Orford 卿が回復したので彼の世話を止めた。

1778年 6月 Haymarket の“little theatre”で *Nature will Prevail* が演じられ、成功をおさめた。7月末 Chatterton 作品の編集者へ私の返答を書いた。

1779年 昨秋、Chatterton 雑文集序文中の不公正な中傷に対する私自身の弁護を書いた。この年1月 Strawberry Hill で200部印刷。それを配付(分配)した。それは、私が7月に書いたものから大幅に増補された。5月末に Mason の後半の詩作への註釈を書いた。

[Horace Walpole の覚書はここで終わっている。続きはこの書簡集の編者によって補充されたものである。]

1779年 2月 Houghton の絵画をロシアの女帝に売却。

7月 Ancaster 公爵死去。彼は、Lady Horatia Waldegrave (Walpole の異母妹の娘) との結婚を望んでいた。

8月 Walpole は Berkeley Square に邸を購入することを決めた。この邸は彼の死まで London におけるタウンハウスとなった。

1780年 1月 Lady Craven の *Modern Anecdotes of*

the Family of Kenvervankotsprachengatchdern, a Tale of Christmas を出版。これは Horace Walpole への献辞付きである。

Charles Miller の *Verses to Lady Horatia Waldegrave, on the Death of the Duke of Ancaster* を Strawberry Hill で印刷。

Croft の *Love and Madness* 中に Walpole の Chatterton との関係への言及がある。

7月 Lady Maria Waldegrave (Walpole の異母妹の娘) が Egremont 伯爵と婚約した。この婚約は直後に彼女によって破談にされた。

9月 Walpole の友人であり通信相手である Madame du Deffand (註 37) が Paris で死去、享年83才。Walpole に彼女の手稿と愛犬の 'Tonton' を遺贈。

Anecdotes of Painting 第4巻を Strawberry Hill で印刷。

1781年 1月 Walpole の義姉 Countess of Orford が Pisa で死去。彼女の遺言に対し、息子の第3代 Earl of Orford から異議が唱えられた。この論争は結果的には仲裁により落着。その間 Horace Walpole が Orford 卿の代理として行動した。

5月 Walpole、海賊版 (剽窃版) の問題に終止符を打つべく、(彼の) 悲劇 *The Mysterious Mother* を出版。(Horace Walpole の求めで描かれた) Reynolds の手になる Waldegrave 姉妹の肖像画が Royal Academy で展示。

8月 William (後の Sir William, Jones) の手になる、Althorp 卿と Bingham 嬢との結婚に関するオードが Strawberry Hill で印刷。タイトルは *The Muse Recalled* である。

9月 Madame du Deffand の手稿を Walpole 受け取る。

11月 Walpole の *Castle of Otranto* に基づく Robert Jephson の悲劇 *The Count of Narbonne* が Covent Garden の舞台にのぼる。

1782年 5月 Walpole の異母妹の娘 Lady Laura Waldegrave と彼女の従兄弟 Chewton 卿 (後の第4代 Earl Waldegrave) が結婚。

10月 Walpole の以前の友人で通信相手でもあった Richard Bentley 氏が死去、彼の子供達に利するように、

これより数年前に Walpole は基金にある額の金を預けた。

11月 Walpole の従兄弟の妻 Hertford 伯爵夫人死去。Walpole は彼女を大いに慕っていた。

12月 Walpole の学友、友人、通信相手である William Cole 師死去。

1784年 1月 Walpole の兄 Sir Edward Walpole 死去。この結果 Walpole の収入が1年 £1,400減少したが、これは Edward と共有していた税関収税官の閑職から得ていたものである。

2月 Walpole、友人であり通信相手でもある William Mason と政治上のことで喧嘩。1796年まで疎遠のままだった。

11月 Lady Maria Waldegrave (Walpole の異母妹の娘) と Earl of Euston 結婚。

1785年 9月 Walpole の *Essay on Modern Gardening* の Duc de Nivernois による翻訳が Strawberry Hill で印刷。英語とフランス語が見開きページに印刷されたものである。

12月 Walpole の友人で賃借人 Clive 夫人、Little Strawberry Hill で死去。

1786年 3月 Walpole、1745年 Sir Robert Walpole により甥に遺された遺産を彼から受け取った。

4月 Lady Horatia Waldegrave (Walpole の異母妹の娘) と Captain Hugh Conway 結婚。

11月 Florence にて Walpole の友人である Sir Horace Mann 死去。彼とは45年間にわたって手紙のやり取りをした。

1787年 1月 Earl of Salisbury と Christine de Pise についての記事が *Royal and Noble Authors* の補遺として、Strawberry Hill で印刷。

1788年 Walpole と Miss Mary (註 38) と Miss Agnes Berry との親しい友情の始まり (註 39)。彼女たちの父親が夏の間 Twickenham に家を借りていた。

1789年 7月 Hannah More の詩作 *Bonner's Ghost*、Strawberry Hill で印刷。

9月 Walpole の姪 Countess of Dysart 死去。

10月 Walpole の異母妹 Lady Mary Walpole の娘婿、第4代 Earl Waldegrave 死去。

1790年 10月 Mary と Agnes Berry 姉妹とその父親が England を発ち大陸に向かう。大陸に1年間以上滞在した。

1791年 1月 George Selwyn^(註40) 死去。彼とは子供の頃よりずっと緊密な友人関係にあった。

11月 Miss Mary と Miss Agnes Berry 大陸より帰国。

12月 Walpole、甥である第3代伯爵死去にともない Earl of Orford を継ぐ。

1791年の間に、Little Strawberry Hill^(註41) の邸と土地を Miss Mary と Miss Agnes Berry に譲渡^(註42)。

1792年 7月 ‘Scrutator’ (精査をする人) の署名付きで、Walpole の Chatterton との関係を批判した内容を含む手紙が、*European Magazine* に掲載されたが、*Cambridge Chronicle* からのリプリントである。

1793-1796年 Horace Walpole、3年間痛風の発作に苦しめられる。Berry 姉妹との付き合いと、また彼女たちが留守の間は手紙のやり取りをしながら時をすごした。

1797年 1月 Horace Walpole の現存する最後の書簡 (Upper Ossory 伯爵夫人宛のもの)^(註43) は1月15日付のものである。

3月2日 第4代 Earl of Orford、Horace Walpole、Berkeley Square (London) の自邸で死去、享年80才だった。

[註 釈]

* 翻訳に使用したテキストは、Paget Toynbee 編集の *The Letters of Horace Walpole, Vol. I* に収録されているものである。

* 註釈項目として、ウォルポールの時代の著名人が多数登場するが、*Dictionary of National Biography* の新版を基本的参考資料とし、その他、

Gerald Newman, ed., *Britain in the Hanoverian Age, 1714-1837: An Encyclopedia* (New York and London: Garland Publishing, 1997).

C. R. N. Routh, gen. ed., *Who's Who in History*, 5 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1969), Vol. 4: *England 1714-1789*, by G. Treasure.

Alan Valentine, *The British Establishment 1760-1784: An Eighteenth-Century Biographical Dictionary*, 2 vols. (The University of Oklahoma Press, 1970).

等々の資料を適宜参照し、箇条書き風にまとめた。従って、人名に関する註釈には、逐一参考資料を明記していない。

(註1) Robert Walpole と Catherine Shorter との結婚生活は最初の数年を除くと不幸なものだった。1717年に誕生した Horace は、二人の間の最後の子供である。1701年生まれの Robert、1703年 Catherine、1704年 Mary、1706年 Edward が Horace の兄姉である。当時の噂では子供 (Horace) は、Catherine と Lord Hervey との間に生まれた子だと言われたが、Robert Walpole はその子を認知した。Horace は母親を尊敬していたが、常々 Robert Walpole が自分の父親だと言っていた。

(註2) 天然痘は当時の人々に非常に恐れられていた。九死に一生を得ても痘痕が残る、結婚前の妙齢の女性にとっては特に恐怖だった。因みに、イギリスに天然痘の予防接種を初めてもたらしたのは、Lady Mary Wortley Montagu とされる。外交官 (で政治家) の夫の赴任先トルコ (イスタンブール) で天然痘の予防接種が行われているのを目のあたりにし、その効果を認めた彼女が母国イギリスに伝えた。[詳しくは、拙論「モンタギュー夫人と天然痘予防接種」『福岡大学研究論文集』第6巻、第4号、2006年を参照されたい。]

(註3) Inner Temple, Middle Temple, Lincoln's Inn, Gray's Inn の4法学院が中世に設立された。中世には大学で ‘common law’ (「慣習法」) を研究することが出来なかったため、それを勉強する人達の為の宿泊所を兼ねた施設として始まったものである。しか

し18世紀には当初の目的を効果的に果たしていなかったように思われる。Picard は 'By then there were four principal Inns of Court, providing professional training and discipline, and, to some extent, living quarters for barristers and judges, but all was not well. The Inns were in the doldrums as educational establishments.' と解説している [Liza Picard, *Dr. Johnson's London*, (London: Weidenfeld & Nicolson, 2000), p.203.]

(註4) Conway, Henry Seymour (1719-1795) 陸軍将官(後に元帥)で政治家。初代男爵 Conway of Ragley の Francis Seymour Conway (1679-1732) と彼の3番目の妻、Bybrook の John 及び Elizabeth Shorter の娘 Charlotte (c. 1683-1734) の次男として生まれる。彼の母親の姉 Catherine は Sir Robert Walpole の妻、従って Conway は Walpole の甥にあたる。彼のお気に入りであった。1732年 Eton 入学。1747年、第3代 Aylesbury 伯爵 Charles Bruce の寡婦で John Campbell (ca. 1693-1770) の娘 Caroline と結婚。彼の娘 Anne は John Damer (1744-76) と結婚。1737年、騎兵中尉に、そして1741年に中佐となる。軍務に関しては1743年 Dettingen、1745年 Fontenoy、1746年 Culloden、1747年 Laufeld などが含まれる。1745年には Cumberland 公爵の副官を務め、1751-53年及び1755-56年、2度にわたってアイルランド副総督を務めた。1756年少将となり、1757年 Rochfort を急襲したが失敗。1759年中将、1761年から63年には Prince Ferdinand に仕えたが、1764年 Grenville 内閣のアメリカ植民地政策に反対したという理由で公職を解かれた。1741年アイルランドの下院及びイングランドの国会議員に選ばれてから彼の政治的キャリアが始まった。彼は Pelham 一党を支持、主に Grafton 或いは Rockingham が支配している選挙区から選出された。1756年から枢密顧問官を務め、1765年7月12日から1766年5月23日まで南部担当国務大臣を務めたが、その折、印紙条例廃止の法案を提出した。1766年5月23日から1768年1月20日まで北部担当国務大臣を務めた。1768年から1772年兵站業務(軍需品部)中將、1772年大將、1772年から95年にかけて、時折居住したことのある Jersey 島総督を務めた。1773年以降彼は一様に North 内閣に反対しつづけた。そして1775年以降植民地に対する戦争継続に反対をした。1782年初めには、North 政権の瓦解につながる攻撃の主要な役割を果たした。Portland 内閣では軍最高司令官となった。1783年 Shelburne の講和条約に反対、1784年には Pitt に反対した。軍人としてはその人格も含めて信頼されたが、政治的には不運で、彼の主義主張に共感する多くの支持者を獲得するには到らなかった。ま

た、この上なく演説が下手だったとも言われる。1793年陸軍元帥となった。

(註5) Mann, Sir Horace (or Horatio), 1st Baronet (1701-1786) 駐フロレンス英国公使。Horace Walpole の友人、1737年、Robert Walpole により、駐フロレンス英国公使だった Fane の補佐役に任命されるが、1740年から1786年まで Fane の後任を務めた。当時フロレンスに在住の若僭王 [James II の孫 Charles Edward Stuart (1720-88)] の情報を主に政府に伝えた。1741年から85年にかけて彼は Horace Walpole と手紙のやり取りをし、その数数千通に及ぶとされるが、当時のフロレンス社会の状況を理解する上での貴重な資料として高く評価されている。1755年準男爵を授かり、68年には Bath 勲位を授った。

(註6) この Orford 伯爵位は Robert Walpole の旧友 Edward Russell の爵位で、彼に敬意を表して選ばれたものだった。

(註7) Paget Toynbee, ed., *The Letters of Horace Walpole*, (Oxford: Clarendon Press, 1903), Vol. I, #88 Horace Mann 宛の書簡中に書いている。それを書いている時に Lord Lovel の子息 Mr. Coke がやって来て、写しを持っていき出版前に広めてしまった云々については、同じく Horace Mann 宛の書簡中(同書簡集中の #93)に言及されている。

(註8) PatapanとはH.Walpoleの愛犬の名前で、彼の書簡の中では1741年3月、彼の従兄弟 H. S. Conway 宛書簡にその名が登場する。'Patapan is so handsome that he has been named the silver fleece: ...' [Toynbee, ed., *Letters of Horace Walpole*, Vol. I, (#39) pp.96-7.]

(註9) 日付は28日ではなく、1745年3月18日である。1744年11月、Robert は、国会開会を前に、国事に関して相談したいとの国王のたつての要請もあり、体調不良をおして Houghton の邸宅を離れ London へと旅立った。Houghton へは生きて帰ることはなかったが、翌年3月18日 Lixivium Lithontripticum (結石溶解性浸出液) という病気の犠牲となり London で亡くなった。3月25日、先立った二人の妻、娘と並んで故郷 Houghton の教会に埋葬された。

(註10) Pritchard (née Vaughan), Hannah (1711-1768) 女優。俳優 William Pritchard (1707-1763) の妻。1733年に初めて Drury Lane にお目見えするが、その前に既に舞台経験はあった。数年間 Drury Lane に留

まりつつも、1741年から47年夏のシーズンは Bristol の Jacobs Wells Theatre の舞台に立ち、1743年から47年にかけては、Rich の Covent Garden にも出演した。彼女は、*As You Like It* の Rosalind 役や *Much Ado about Nothing* の Beatrice 役で絶賛された。また1741年、Macklin の画期的演出、*The Merchant of Venice* では、Kitty Clive が Portia 役を、Pritchard が Nerisa 役を演じた。1748年には Garrick が自ら率いる新しい劇団に加わるよう彼女を Drury Lane に招いた。彼女は21年間にわたって Garrick 率いる劇団の主演女優の一人であり続け、喜劇の分野でめざましい活躍をしたが、同時代の女優たちを凌ぐ役柄として忘れられないのは *Lady Macbeth* で、1748年 Garrick を相手に初めてこの役を演じた。晩年彼女は肥満に悩まされたが、1768年の引退公演でもこの役を選んだ。この公演以降 Garrick は2度と *Macbeth* を演じることはなかったと言われる。

Pritchard 夫人には、Henry (1713-1779) と William (1715-1763) という弟が二人いて、ともに舞台俳優である。娘の Hannah (1739-1781) も舞台女優で、1756年 Garrick の一座に加わり、その初舞台では母親が *Lady Capulet* を、娘の Hannah が *Juliet* を演じた。

(註11) 名誉革命で廃位された James II 世兼 VII 世及びその子孫を支持し、彼等の勢力回復を企てた Jacobites の反乱は18世紀にも起こり、1719年、第2代 Duke of Ormonde がスペイン軍を率いてイングランド上陸を試みたが失敗、22年には Stuart 家の復位をはかった Atterbury's Plot (アタベリー陰謀事件) が企てられたが未遂に終わり、これ以後イングランドの Jacobites は細っていった。しかしスコットランドの Jacobites は依然として根強く、1745年若僭王 (the Young Pretender) こと Charles Edward Stuart を助けて1745年反乱 (Forty-Five Rebellion) を起こし、イングランドに侵入、一時は政府を狼狽させることもあったが最後には敗れて鎮圧された。引き続いてスコットランド Highlands で過酷な弾圧が行われ、氏族 (Clan) 制度は崩壊し、これをもって Jacobites の活動は事実上終焉した。

(註12) Lyttelton, George (1709-1773) 一家の縁故で政治の世界に身をおくこととなったが、自らは作家、詩人、文芸評論家であることの方を好んだ。著名にはなったが現在彼の著作が読まれることはほとんどない。18世紀イギリスを代表する小説家 Henry Fielding の友人でありパトロンでもあった。Fielding は自身の傑作 *Tom Jones* (1749) を彼に献呈している。また *Tom Jones* 中の主要登場人物の一人 "Squire Allworthy" は彼をモデルにしていると言われる。ア

マチュアの景観建築家である Lyttelton は自分の領地に庭園をデザインし、高く評価されている。1735年 "Cobham's Cubs" という一族の政治グループの一員として国会議員となる。彼の属する党派が、Pelham 内閣の、党派を選ばず無差別に大臣を寄せ集めて作った所謂 'Broad-Bottom Administration' に参画すると、彼は副大蔵卿となった。しかし1755年、大ピット (Pitt the Elder) に従い反対党になることを拒否すると、大蔵大臣 (Chancellor of Exchequer) のポストを受けた (1755年から1756年) として、かつての仲間達から批判された。1756年男爵位を授かり、1760年代には従兄弟の Grenville 一族そして Pitt とも和解した。

彼の2人の弟 Richard (1718-1770) と William (1724-1808) も下院で国会議員を務めたが、Lyttelton の御一党とはみなされていない。

(註13) Pelham, Henry (1696-1754) 政治家・首相 (1743-54)。初代 Pelham 男爵 Thomas Pelham の子で、Newcastle 公爵 Thomas Pelham-Holles の弟。Westminster School、Oxford で教育を受ける。Henry Pelham は Sir Robert Walpole の後を継いだ偉大な Whig 党首相だったが、政治家としての真価は、彼の兄 Newcastle 公爵 Thomas Pelham-Holles の政治キャリアに霞んでしまう感がある。しかし Pelham が大蔵大臣として内閣を率いていた間、財政合理化、下院における安定多数の維持、野党議員を説得してうまく味方に引き入れたり、George II の信用を勝ち得たりした。首席大臣つまり首相として、彼は正直で、共に協力して同僚に仕事をさせる才能及び手腕をもっていた。1754年3月6日、国王が Pelham 死去を知った際、「最早私に平安はない」と嘆いた。

Pelham は1717年 Whig 党下院議員として政界に入った。そして次々重要ポストについた。1721-24年副大蔵卿、1724-30年戦争担当大臣、1730-43年大蔵省主計長等である。彼の同志 Robert Walpole は彼を下院における自らの代理役、つまり政治的後継者とした。1742年 Walpole が辞任した後、Pelham と Newcastle が国王の支持を得始め、政権をコントロールし始めた。結果的に、彼等は broad-bottom administration (裾野政権/党派閥横断政権の意) を強固なものにすることに成功 (1746)。Pelham は、彼の主な財政上の業績、つまり3%の低金利での国債の整理統合が自慢だった。彼はまた機密活動費を Walpole 時代の半分以下にまで切り詰めたことで国王を喜ばせた。

Pelham と同時代の人々は高潔で誠実な彼の人柄を敬愛したが、同時に、他の人たちが私服を肥やすのが当たり前の時代に、彼の場合は、様々な役職に就いてそこから私腹を肥やすことをしなかったと称賛した。

(註14) Grenville, George (1712-1770) Buckinghamshire の著名な紳士階級の家柄の子孫で Eton, Oxford 大学で教育を受けた。1741年から70年まで国会議員として活躍。Lord Bute そして George III の支持者として 7年戦争の最後の数ヶ月間は海軍大臣 (First Lord of Admiralty) (1762-1763) として、その後は首相 (1763-1765) として仕えた。George Grenville は秀れた政治一家の家長であった。彼の長男は侯爵、末息子 (William Wyndham Grenville) は男爵で首相を務め、彼の最年長の孫息子は1822年初代 Buckingham 及び Chandos 公爵となった。

Grenville は秀れたビジネスマンで、長年にわたり秀れた派閥の領袖であったが、彼の短期政権は、煽動的中傷による John Wilkes の告発 (1763) と1765年の印紙条例可決により評価されることとなった。疎外されたアメリカ植民者達にとっての不運な結果故に後者の印紙条例はとんでもない大失策ということになるのだが、Grenville のアメリカ政策は必要でもあり賢明なものでもあったとも言える。政府側から見ると印紙条例は財政上及び道徳上確かに妥当だったように思われる。1765年7月の Grenville 政権の瓦解は、印紙条例が原因だったというよりも、恒例となっていた Grenville の国王への不愉快な説教の所為だった。権力の座から降りても Grenville はアメリカに税を課するという運動は続行したし、新しい財政政策可決を目ざして Charles Townshend に協力したが、そうした財政政策でアメリカ植民地の危機的状況は一層悪化した。

(註15) Stanhope, William, 2nd Earl of Harrington (1719-79) 初代 Harrington 伯爵の息子。1742年以降 Petersham 子爵と称する。1756年父親 William Stanhope (1683?-1756) の跡を継ぎ、第2代 Harrington 伯爵となる。1732年 Eton 入学とされる。1746年第2代 Grafton 公爵 Charles Fitzroy の長女 Caroline と結婚。彼女は美人の誉れ高く、また Horace Walpole の友人でもあった。彼 William は、1738年第10歩兵連隊の旗手 (少尉)、1745年 Fontenoy で名を上げ、大佐、1755年少将、1758年中将、そして1770年大将となった。しかし、彼は軍事上の職務において目ざましい功績を何もあげていない。政治的業績においては尚更である。彼は 'Peter Shambler' という独特のよたよた歩きで有名だった。自ら精一杯努力するということなく、ただ George II の下、継続した Whig 政権を支持していたように思われる。1778年の *The Royal Register* が彼の事を「最低の売春宿の最低の快楽の為に、全ゆる自国の職務を、全ゆる世間的関心事を無視して、品位や品行の見てくれを犠牲にしている貴族」と評した。時に如何にも妬ましげに、「極めて例外的不品行もの」と見るものたちもいた。1748年以降彼

は Dublin 港税関の役人職を握っていたが、1779年4月1日その死まで手離さなかった。妻 Caroline は彼よりも長生きし、1748年6月28日急逝した。

(註16) Dodsley, Robert (1703-1764) 詩人、劇作家、書籍商。Nottinghamshire の学校長の息子として生まれる。London で召使をしていた彼は文学サークルのちょっとした名士となった。Pope の目に留まり、1735年 Pall Mall で書籍商として商売を始める際にも Pope の支援を受けた。始め彼の出版物はそのほとんどが Pope 及び彼の仲間、そして Dodsley 自身のものだった。文学関連の出版社として評判を確立するうちに、Dr. Johnson, Goldsmith, Collins, Gray, Young などの作品を出版するようになった。この他 Dodsley には2つ重要な出版物がある。*A Collection of Poems by Several Hands* (1748-58) と *A Select Collection of Old Plays* (1744) の2つのアンソロジーである。彼が Laurence Sterne の *Tristram Shandy* の出版を拒否したのは有名な話だが、この作品が売れないだろうと判断を誤ったからで、彼の商売上の大失敗だった。1742年頃、弟の James がビジネスに参画、兄 Robert が亡くなった後には彼が家業を引き継ぎ、その伝統と評判とを守った。

(註17) 1749年11月17日付 Horace Mann 宛書簡で、'a lamentable history' として、強盗に襲撃された事件について触れている。「・・・新聞で読んでびっくりするだろうが、どうか驚かないでくれ給え。とても危険ではあったが、気づいた時には終わっていた。受けた傷については、触れるほどのこともない。」と如何にもさり気なく書き流してはいるが、文字通り「九死に一生を得た」という表現がびったりの、危機一髪の災難だった。Paget Toynbee は、その箇所の註に、'Mr. W. had been robbed the week before in Hyde Park, and ...' と書き記している。だとすると、「11月初め」は、より具体的には11月10日頃ということになる。

(註18) Sloane, Sir Hans, 1st Baronet (1660-1753) 医師。パリとモンペリエにて研鑽を積む。英国人医師 Thomas Sydeham 宅に住まう。1687年から9年にかけて Jamaica 総督の典医。1693年から1712年にかけては Royal Society (王立協会; 1660年創設、英国最古の自然科学振興を目的とする学会) の協会会長を務めた。パリ、セントペテルスブルク、マドリッドの科学アカデミー国外 (外国人) 会員、1719年から35年にかけては王立医学校学長、Anne 女王侍医も務め、1716年に準男爵を授かった。1727年には George II の侍医頭 (長)、1693年から1730年にかけては Christ's Hospital 医長、1712年 Chelsea の領地購

入、1721年には Botanic Garden 創設。著作としては 1696年ラテン語による Jamaica の植物カタログを出版、1707年と25年には *Voyage to Islands of Madera, Barbadoes, Nieves, St. Christopher's and Jamaica* を出版した。Chelsea の教会墓地には彼の記念碑が建立されている。彼の膨大なコレクションは、1754年、国により買い上げられ Montague House (後には British Museum) に収蔵された。

(註19) Byng, John (1704-1757) 海軍大将。同じく海軍将官で Torrington 子爵 George Byng (1663-1733) の4男。1718年海軍に入り、1727年から36年にかけては地中海で(木造)高速帆船の指揮をとる。1745年少将(rear-admiral)に昇進。1756年4月、7年戦争への参戦を前に、フランス軍に包囲された Minorca 島守備隊(駐屯軍)救出の命を受け出立。戦意不足というよりも、軍事力不足と作戦の失敗故に任務を遂行出来ずに、守備隊を残したまま撤退。この事がイギリス国民の怒りを引き起こし、「職務怠慢」の廉で軍法会議にかけられることとなった。Portsmouth 港の英国海軍 Monarque 号後甲板上での Byng の死刑(銃殺刑)(1757年3月14日)は、軍法会議(法廷)の恩赦(死罪を一等減ずる)の忠言にもかかわらず、職務(任務)怠慢を死罪とした(1749年改定)戦争に関する第12条項を妥当なものとする論争をかき立てることとなった。またこの事件は、Newcastle 公爵の失策により Byng がスケープゴート(犠牲)にされたということで、政府の戦争政策をめぐって悪意に満ちた論争を引き起こすことにもなった。

(註20) Vertue, George (1684-1756) 彫刻家及び古物愛好家。彼は多作の、肖像そして古物を対象にした彫刻家であった(1717年古物愛好家協会に彫刻家として承認された)が、イングランドの美術史に関連して膨大な量の資料を収集したことで非常に重要な人物である。その資料は、現在は British Library に収蔵されている。Vertue の死後 Horace Walpole が彼の資料を入手、それら資料を存分に活用して *Anecdotes of Painting in England* (1762-71) を書き上げた。Vertue の資料それ自体は1930年から50年にかけて本体6巻に索引1巻の形で出版された [Ian Chilvers, *Oxford Dictionary of Art and Artists*, 4th Ed. (Oxford University Press, 2009), 'Vertue' の項目参照]。

(註21) Müntz, Johann Heinrich (John Henry) (1727-1798) 画家、建築家。父親は学校長 Martin Müntz。母親は Judith [née Dolfuss (1697-1763)]、3人兄弟の2番目として Mulhouse の町で1727年9月28日に生

まれる。フランス軍のスイス人連隊大尉をしていた1748年に Müntz はスペインでゴシック(風)記念碑の記録をとった。1751年9月、画家、石工、ガラス職人の組合である Mulhouse's Tribu des Maréchaux の組合員として認められ、ローマへ出掛け、そこで1753年まで古代瓶壺の模写をした。翌1754年 Channel Islands の Jersey で画家で劇作家の Richard Bentley (1708-1782) に会い、彼を通して Horace Walpole と知り合いになる。Walpole に雇われ、Strawberry Hill の装飾を任される。そこで Müntz は地方性豊かな一連の秀れた絵画を描き、巨匠達の模写に励み、蠟画法の実験も始めた。不幸にも2人の関係は、1759年後半の喧嘩がもとで壊れた。1760年 Müntz は *Encaustic, or, Count Caylus's Method of Painting in the Manner of the Ancients* を出版。1763年と1764年には、Jerusalem と Greece で風景を記録、1777年までは Holland で牧歌的風景画を描くと同時に、冶金家として制作に励み、また製錬や古代瓶壺に見られる卵形(状)に関する論考を執筆した。1786年には Germany の Kassel へ移る。1793年、Kassel Royal Art Academy 及び Academy of Artists and Architects の会員となる。1798年5月 Kassel で死去。Kassel の Oberneustadt Deutsche Gemeinde に埋葬、Riede Park には彼の栄誉を記念して碑が建立された。

(註22) Sackville, George, 1st Viscount Sackville (1716-1785) George Sackville Germain (1770年以降、自らの姓の後ろに 'Germain' を付加するようになった) は、Dorset 公爵の3男として生まれ、Westminster School、そして Dublin の Trinity College で教育を受けた。1737年軍隊に入り、オーストリア継承戦争で名を上げた。そして45年反乱では Cumberland を助けて Jacobites を壊滅させた。しかし7年戦争では臆病(卑怯)との批判を受け、軍法会議にかけられた。1759年 Minden の戦いでは軍隊を進めよとの命令を拒否したことから自らの名を汚すこととなった。1774年、North 内閣で、植民地担当の国務大臣に任命される。強硬論者で、全ゆる妥協に反対、全ゆる和平会議反対というので軍幹部達が離れていった。1777年 Saratoga (New York 州東部の村、現在の Schuylerville) での戦いに敗れ、彼は反戦を主張する政治家達の標的となった。North 内閣の他の閣僚と違い、Germain は、Yorktown での降服をイギリスにとって致命的なものとは理解していなかった。しかし、1782年、功績の印に子爵位を授かると、辞任を余儀無くされた。

(註23) Shirley, Laurence, 4th Earl of Ferrers (1720-1760) 第4代 Ferrers 伯 Laurence Shirley は、

Laurence Shirley (1693-1743) と初代男爵 Sir Walter Charges の娘である妻 Anne (d.1782) との長男として、1720年 8月18日に生まれた。父親は、初代 Ferrers 伯 Robert Shirley の 4番目の息子だった。

Laurence は、1737年、Oxford の Christ Church に入学したが、学位は取らなかった。1745年、伯父で、第3代 Ferrers 伯 Henry の死去に際し、伯爵位と財産とを受け継いだ。伯父の第3代 Ferrers 伯は精神異常だったとされる。Laurence は、貴族院では不活発だったが、1746年 5月2日、Flanders での戦いには反対、また1747年 5月21日、Scotland における相続司法権全廃賛成の法案に対し反対した。1752年 9月16日、彼は、Henbury (Cheshire) の Amos Meredith の 5番目の娘で、第3代準男爵 Sir William Meredith の姉妹でもある Mary (1737/8?-1807) と結婚。二人の間に子供はなかった。彼は、攻撃的な夫で、王座裁判所で、解放が認められるまで、Mary を Staunton Harold (Leicestershire) の彼の屋敷に監禁し続けた。

(London の国教会) 監督法院は、彼の妻が同法院に離婚訴訟を起こした後、1757年彼を侮辱罪で破門するという厳しい措置をとった。妻 Mary は、1758年虐待の理由で正式に離婚することが出来た。その後、Laurence は愛人 Margaret Clifford と Staunton Harold で同棲。Ferrers と愛人との間には 4人娘がいた。1758年、国会で正式に離婚が認められると、Ferrers の財産(権)は保管人たちの手に付与された。そして長年 Shirley 家に仕えてきた John Johnson が地代の受取人に任命された。Ferrers は執事に対する異常なまでの恨みから、1760年 1月18日、Staunton Harold の鍵をかけた部屋で John をピストルで撃ち殺した。Ferrers は捕えられ、貴族院の法廷で尋問を受けた後(2月13日) London 塔に投獄された。彼と地位の等しい貴族による裁判は 4月16日 Westminster Hall で始まった。精神異常のために責任を問えないということで、何とか極刑を逃れようと様々な画策をしたが、4月17日貴族院(議員たち)は満場一致で殺人により有罪と認めた。翌18日国璽尚書で、王室執事長を務めていた初代 Henley 男爵 Robert Henley は、彼に死刑を言い渡した。Ferrers は 5月5日 Tyburn で絞首刑にされた。刑の執行に立ち会ったのは William Hickey。遺体は St. Pancras の鐘楼下に埋葬される前、解剖に付されたが、1782年 6月3日、Staunton Harold に改葬された。Ferrers は、愛人 Margaret Clifford と子供たち、そして犠牲者家族の為に、East India Company の社債4,000ポンドを遺したといわれる。Johnson 一家は、この他にも Ferrers の地所から上がる地代6,000ポンドの受取人になった。Ferrers の元妻は1769年 3月28日 St. Martin-in-the-Fields で Lord Frederick Campbell (1729-1816) と結婚。1807

年7月26日、Kent の Coombe Bank で、就寝して読書中、照明具によるものとされるが、火事により、亡くなった。

(註24) Coke (née Campbell), Lady Mary (1727-1811) 貴族夫人、書簡作家。1727年 2月6日、Surrey 州 Sundbrook (或いは London の 27 Bruton Street) で生まれる。軍人、政治家の第2代 Argyll 公爵兼 Greenwich 公爵 (1680-1743) と彼の 2番目の妻で Queen Anne 及び皇太子妃 Caroline の侍女を務めた Jane (c. 1683-1767) の第5子、末娘として誕生。1747年 4月1日、Leicester 伯 Thomas Coke の息子 Edward Coke (1719-1753) と結婚。結婚生活は最初から不幸なもので事実上監禁状態だったが、1750年和解成立して以降、Sundbrook で母親と同居出来るようになった。1753年 Viscount Coke が亡くなってからは気儘な社交生活を送ることになる。彼女の貴族としてのバックグラウンドや政治的縁故に最上級の社交界に出入りすることが出来たが、その独特の気質故に多くの人が離れていき、また物笑いや軽蔑の対象ともなった。York 及び Albany 公爵 Edward Augustus との恋愛遊戯はあったが、2度と結婚することはなかった。

Lady Mary は幾度もヨーロッパ大陸へ出掛け、特にウィーンの Maria Theresa の宮廷に出入りした。また彼女は長年にわたり Horace Walpole と親密な友情関係を結んだ。彼女の特異な気質に手を焼くこともあり、Lady Mary と彼女の 2人の姉妹、Greenwich 男爵夫人 Caroline Townshend と Lady Betty Mackenzie のことを 3人の復讐の女神と称したこともある。彼女に対する彼の苛立ちには彼女への真の愛情がないまぜになっていた。しかし不幸にも 1775年パリで、Walpole が Lady Mary と Barrymore 伯爵夫人 Emily Barry (née Stanhope) との口論の仲裁を断ったことから喧嘩となり、2人の友情が元にもどることはなかった。1811年 9月30日 Chiswick (Middlesex) の Morton House にて死去。1811年 10月11日 Westminster Abbey の Argyll 地下納骨所に埋葬された。

(註25) 国王御誕生日祝賀行事では貴女には誰よりも輝いて見えてほしいから、体調を崩している貴女に祝賀行事行きを止めるよう勧めたのもやむを得ないでしょう、という旨の書簡は、#753 (1761年 6月13日付) である。戯れ説教そのものは、結構長文のもので、同書簡の中にはない。こちらは、*Letters and Journals of Lady Mary Coke* に掲載されている [*The Letters and Journals of Lady Mary Coke* (1889-1896: rpt. Bath: Kingmead Reprints, 1970), Vol. III, pp. xii-xiv.]。

(註26) Fitzpatrick (née Liddell), Anne, Countess of Upper Ossory (*other married name* Anne Fitzroy, Duchess of Grafton) (1737/8-1804) Horace Walpole の書簡相手でもある Upper Ossory 伯爵夫人は、後の Ravensworth 男爵、第4代準男爵 Sir Henry Liddell と彼の妻である、Sir Peter Delmé の娘 Anne (1712-1794) の一人子であった。父親は England 北東部の、実質上の炭鉱主だった。1756年1月29日、London, St. James's Square の父親宅で Euston 伯 (1735-1811)、Augustus Henry Fitzroy (1735-1811) と結婚、また彼は1757年には祖父の跡を継ぎ第3代 Grafton 公爵となった。4人の子供が生まれたが、Georgiana (1757-1799)、George Henry (1760-1844) (彼は父親存命中に Euston 伯を名のった)、1761年に誕生そして死去した息子、そして Charles (1764-1829) の4人である。公爵夫人と Horace Walpole の書簡のやり取りは1761年夏の終わりに始まった。Grafton 公爵夫人はなかなか魅力的な女性だったと言われるが、結婚生活はうまくいかなかった。公爵は、妻が大掛かりな社交の集まりが大好きなのとカードゲームで浪費することが気に入らなかった。1764年公爵夫人が末子を身ごもると Nancy Parsons という娼婦と大っぴらに付き合うようになる。1765年1月 Grafton 公爵夫妻は合法的に別居。1767年11月までには公爵夫人は Lord Ossory と恋愛関係にあったが、2人が正式に結婚したのは Grafton 公爵との離婚が1769年3月下旬に正式に認められた直後のことである。後年 Horace Walpole もある書簡中指摘しているが、夫人2度目の結婚はうまくいった。1769年、Lady Ossory と Horace Walpole は定期的に書簡を取りかわすようになった。1784年11月、Walpole の異母妹の娘 Lady Maria Waldegrave が Lady Ossory の息子 Lord Euston と結婚したことで、2人の友情関係はより強いものとなった。Lady Ossory は1804年2月24日、Grosvenor Square の自宅で死去。3月4日、Grafton Underwood (Northamptonshire) の St. James's Church に埋葬された。

(註27) #754の書簡中に、その詩文が書き込まれていて、内容の一部を垣間見ることができる。6月13日付、Countess of Ailesbury 宛の書簡に、'My Duchess was to set out this morning. I saw her for the last time the day before yesterday at Lady Kildare's: never was a journey less a party of pleasure.' と記されている。この時の Grafton 公爵夫人は沈みがちで、Pelham 嬢が風変わりな面白いことをやっても Horace Walpole が元気づけようとしても効き目がなかった。しかし、その夜の集いの終わり頃、朝方3時頃になってやっと彼女の気持ちを少し上向きにするこ

とができた。如何にも Horace Walpoleらしい粋な心配りを感じ取ることができるので、肝心の詩文も含めて引用しておこう：

Towards the end of the night, and that was three in the morning, I did divert her a little. I slipped Pam into her lap, and then taxed her with having it there. She was quite confounded: but taking it up, saw he had a telescope in his hand, which I had drawn, that the card, which was split, and just waxed together, contained these lines:

Ye simple astronomers, lay by your glasses:
The transit of Venus has proved you all asses:

Your telescopes signify nothing to scan it;
'Tis not meant in the clouds, 'tis not meant of a planet:

The seer who foretold it mistook or deceives us,

For Venus's transit is when Grafton leaves us.

[Toynbee, ed., *Letters of Horace Walpole*, Vol. V, pp. 66-67.]

(註28) 第3代 Bute 伯 John Stuart 夫人。ここでは、夫 Bute 伯の経歴を中心に簡条書き風にまとめておこう。

Stuart, John (1713-92) 第3代 Bute 伯。スコットランドの、初代 Argyll 公爵 Archibald Campbell の孫として Edinburgh に生まれる。1723年父親 James Stuart の伯爵位を継ぐ。Eton で教育を受ける。1736年 Edward と Lady Mary Wortley Montagu の一人娘 Mary と結婚、Mary は母親から膨大な遺産を引き継いだ (1761年 Mary は自ら男爵位を授かった)。1737年以降彼はスコットランドの高等弁務官、1738年勲爵士、そして1737-41年及び1760-80年にはスコットランドの貴族を代表して貴族代表議員を務めた。1751年英国皇太子が亡くなるまで皇太子 Frederick の侍従長、そして皇太子が亡くなった後は彼の息子で皇太子、後の George III の家庭教師役となった。新国王のお気に入りでも有力な首相候補者というので崇められ恐れられ中傷され媚諂われた彼は宮内官で、1761-92年 Richmond Park の (御料林) 監守、1762年以降は Garter 勲爵士、1761年3月25日から1762年5月29日までには北部担当国務大臣、この1762年5月29日彼は蔵第一卿 (首相兼任) となり、1763年4月16日までその職にあった。スコットランド人ということもあり常々 London 市民には不人気で、首相の座にまで登りつめるのも早かったが没落するのも早かった。後継首相の George Grenville とその他新内閣の閣僚達は彼

の影響力を恐れて、政界から引退するのみならず個人的にも国王との接触が出来ないように仕向けた。1765年貴族院で Stamp Act（印紙条例）に反対票を投じた。1761年以降 Aberdeen の Marischal College 総長、1780年スコットランド古物愛好家協会会長、1765-92年にかけて British Museum の評議員を務めた。晩年には大陸をお忍びで頻繁に旅してまわった。

(註29) 書簡#796は、1761年12月23日付、George Montagu 宛のものである（日付の12月23日について、編者 Paget Toynbee は、12月3日の誤りであると注記している）。その書簡の終わり方に、「手紙の締めめに埋め草代わりに先日即興で書いた詩文を書きつけておこうか」といって、後年有名となった 'On having St. Anthony's Fire in her Cheek' を記している：

No rouge you wear, nor can a dart
From Love's bright quiver wound your heart.
And thought you, Cupid and his mother
Would unrevenged their anger smother?
No, no—from heaven they sent the fire
That boasts St. Anthony its sire ;
They pour'd it on one peccant part,
Inflamed your cheek, if not your heart.
In vain—for see the crimson rise,
And dart fresh luster through your eyes ;
While ruddier drops and baffed pain
Enhance the white they meant to stain.
Ah ! Nymph, on that unfading face
With fruitless pencil Time shall trace
His lines malignant, since disease
But gives you mightier power to please.

(註30) *North Briton* *The Briton*誌(1762年 Smollett が発行した週刊政治誌で Lord Bute を支持、翌1763年廃刊)に反対して、C. Churchill 援助のもとに、1762年 J. Wilkes が創刊した週刊政治評論誌。翌1763年第45号の記事が当局の不興を招き廃刊になった。1768年復刊したが、かつての勢いはなく翌年廃刊になった。

(註31) *North Briton* 第2号の本文後半で、筆者は次のように Horace Walpole のことを揶揄・攻撃している：
彼 (Horace Walpole) は我々スコットランド人のことを貧乏で荒々しい(粗野な)北国人だと言っている、そしてイングランドにいるスコットランド人によって占められる給付金と就職数は彼等スコットランドの貴族全体が自国スコットランドで占めているよりも大きい。そして、彼等がスコットランド国民を形に調達している金は文民・軍人に支払うに十分なものではな

いと主張している。しかし、これは Anne 女王の治世の後半のことで、今は全く状況が違う。(そうした H. Walpole 氏の指摘が頭から考え出されて理知的に出てきたものではなく、つい感情的に言ってしまったものだ)と願いたい) 私はそうしたスコットランド (人) に対する極めて偏った諷刺故に Walpole 氏のことを誰よりも先に推したいし、彼を名簿上、我がスコットランド人とココアツリー (Tory 党員) の次に挙げられんことを閣下に嘆願したい。[*The North Briton* (1763 ; rpt. New York : AMS Press, 1976), pp. 11-12.]

(註32) 書簡#1165。1767年3月13日付、William Langley 宛のものである。冒頭 Horace Walpole は、健康が衰えていること、全ての公職から身を引きたいという思いから、Lynn 選出の国会議員にはならない旨を表明している。また25年間以上国会議員を務めてきたが、誰に限らず個人的恩顧を求めたこともないし、それを受けたことない、また国会での投票に際しては愛顧や何か影響力に左右されたこともない、と言っている。

[Toynbee, ed., *Letters of Horace Walpole*, Vol. VII, pp. 92-94.]

(註33) Clive (née Raftor), Catherine (Kitty) (1711-1785) 女優。1711年の生まれ、父親はKilkenny の弁護士 (lawyer) William Raftor、母親は Fishstreethill の有力な市民 Daniel の娘だと言われる。両親にはたくさんの子供があったと言われるが、後に Kitty 同様舞台にたった James と、結婚して Mrs. Mestivyer となった娘以外に名前はわからない。1728年初舞台とされるが、1728年から29年のシーズン中に徐々に重要な役を演じ始めるようになった。そして悲劇の役回りから、段々と軽い出し物の中で歌を歌ったり、当時人気だった笑劇の主要登場人物を演ずるようになる。Kitty の声質と喜劇の才能が当時流行の喜歌劇やバーレスク (笑劇) に最適だった。Henry Fielding も幾つか彼女用に台詞を書いている (例えば、*The Lottery* 中の Chloe など)。1732年夏、喜歌劇で女性の役としては最も人気の高い *The Beggar's Opera* の Polly 役を与えられた。彼女 (Catherine Raftor) の法廷弁護士 George Clive との結婚に関しては詳しいことはほとんどわからないが、1733年10月に初めて請求書の中に Mrs. Clive という名前が登場するのでその頃結婚したのではないと言われる。また2人の関係は長くは続かず、1735年のある時期に別れた模様である。1736年 Polly 役を Clive 以外の女優にも幾つか公演させようとしたことをめぐって争いが起きる。この紛争の御蔭で *The Beggar's Pantomime*,

or, *Contending Columbines* という笑劇まで生まれ、Lincoln's Inn Fields で定期的に上演された。Charles Macklin と David Garrick が特許権所有者の独占を打ち破ろうと第3番目の劇場オープンに失敗した後、Kitty Clive も数年にわたり不遇を経験したが、1747年に Garrick が Drury Lane の特許権を獲得してからは彼女のキャリアも安定してきた。彼女の舞台女優としての長いキャリアは London 中心、しかも1743年から45年にかけて Covent Garden の舞台に立ったのを除くと、後はすべて Drury Lane であった。Horace Walpole とはプラトニックながら親密な友情関係を結び、Walpole は自分の所有地内に小さな屋敷を提供したりしている。1769年舞台から引退。晩年には病気（自らは黄疸だと言っている）に見舞われることも多くなり、Henry Lister 中將の葬儀に参列、風邪を引き、それがもとで1785年12月6日死去、12月14日 Twickenham の教会墓地に埋葬された。

(註34) Kallich は、*Hieroglyphic Tales* の 'Preface' を一部引用しながら作品誕生のきっかけと出版について記している：

"Apprehensive lest the work should be lost to posterity," as Walpole wrote with mock gravity in his preface, he had the Hieroglyphic Tales printed on his press in 1785, only seven copies of a collection of six fantasies. The first was written in August, 1766, and the remainder between 1770 and 1772 apparently for the amusement of his little female friends, Miss Caroline Campbell, eldest daughter of Lord William Campbell, who lived with her aunt, the Countess of Ailesbury (Conway's wife); and Lady Anne Fitzpatrick, daughter of the countess of Upper Ossory, with whom Walpole carried on an extensive correspondence.

更に Kallich は、この fairy tales の数（実際印刷されているのは6篇）について（註）を付記しており、その中で Horace Walpole の Yale 版書簡集の編集者 W. S. Lewis は、この御伽噺の第7篇を所有しているし、第8篇目が書かれた可能性もあると指摘している。

[Martin Kallich, *Horace Walpole*, Twayne's English Authors Series (New York: Twayne Publishers, Inc., 1971), p. 117.]

(註35) ロンドン市長 (Lord Mayor of London) を3度勤めた (1397-98, 1406-7, 1419-20) 半ば伝説的人物。彼 (Whittington) は少年の頃 London を出て行ったが、その際教会の鐘が、Whittington, London 市長

になって再びもどっておいで、と言っているように思われた。後に、船主に託した飼猫が鼠の害に悩まされていたモロッコの王様に喜ばれ多額の金銀財宝とひきかえに引き取られ、たちまちのうちに億万長者になった。そして教会の鐘の予告通りロンドン市長になった、というよく知られた物語の主人公として余りにも有名である。

(註36) Colman, George the elder (1732-94) 劇作家及び劇場支配人。Garrick との友情から演劇に興味をもつようになった。彼の最初の劇作品 *Polly Honeycombe* (1760) は初めは Garrick 作とされたものである。1766年 *The Clandestine Marriage* が成功するまでは Colman が作者だとは認められなかったが、この作品は Colman の最高の作品とされるのである。この作品はしばしば再演されたが、Lord Ogleby 役を Garrick が拒否した為に彼に代わって Tom King が演じた。Garrick に対する不満の表明として、Colman は Covent Garden 時代に Goldsmith の劇作品を含め数多くの優れた作品を上演した。その後1766年 Haymarket に移り、そこで John Gay の *Polly* を始め息子 George の初期作品の幾つかを上演したが、彼の劇場支配人としての優秀さを明らかに示すものであった。[Phyllis Hartnoll, ed., *The Oxford Companion to the Theatre*, 4th ed. (Oxford University Press, 1983), 'Colman' の項目参照。]

(註37) Marie de Vichy-Chamrond, *marquise* du Deffand (1697-1780) フランスのサロンの主宰者。貴族の娘。修道院から結婚生活に入るが愛はなく社交界で気を晴らす。その懐疑的知性と美しさで各界名士を引きつけ、サロンを開き、ヴォルテール、モンテスキュー、デイヴィッド・ヒュームら一流の客人を集め栄えるが失明。夫人が目をかけていたレスピナスはよき手助けとなるがやがて離反、独立する。失意の中で夫人のサロンは続いた。Horace Walpole と Deffand 夫人との出会いは、1765年9月彼が Paris を訪れた折りのことである。その後幾度か Paris を訪れ、その度に夫人を訪問しているが、主に書簡を通して緊密な友情を彼女の死まで持続させた。[『集英社 世界文学事典』(2000年)の「デファン夫人」の項目参照。]

(註38) Berry, Mary (1763-1852) 日記作者及び編集者。Yorkshire 生まれ。フランスに住んでいた時期を除いて London に住まった。母親は彼女が未だ小さい時に亡くなった。父親は法律の教育を受けたがその専門職についたことはなく、政治的には自由主義の、気楽な無精者で、自分自身のそして自分の子供達の利(害)に全く無頓着だったので、彼の弟が資産家のス

コットランド（人）商人であるおじの財産の第1位相続人になり代った。Mary Berry は妹の Agnes 共々若い頃に体験した大きな遺産を取り損なった事に非常に辛い思いをした。しかし本来は自分のものであったはずの資産を失っても、自分達は上流階級なのだという意識をなくすことはなかった。1783年 Mary Berry は初めてヨーロッパ旅行を行った。そこで日記を書き始めたが、これは生涯続いた。Horace Walpole との友情関係は1788年に始まった。そして1797年 Walpole が亡くなった時には、2人の姉妹は金銭と不動産を遺贈された。1795年 Mary Berry は Charles O'Hara 大將と婚約したが、Gibraltar 総督に任命された際、同行出来ない主張した為その婚約はやむやみになって、Mary は生涯独身を通すこととなった。その埋め合わせでもあるかの様に、彼女は London の邸に England や France の著名な人士を迎え入れた。1798年には *Horace Walpole's Works*、1810年には *Letters of Madame de Deffand to Horace Walpole* を編集・出版している。

(註39) Horace Walpole が Mary と Agnes 姉妹に初めて会ったのは、この前年1787年冬のことだった。1788年10月11日付、Countess of Upper Ossory 宛書簡 (#2651) に記されている。
[Toynbee, ed., *Letters of Horace Walpole*, Vol. XIV, p. 87.]

(註40) Selwyn, George (1719-91) John Selwyn 大佐 (1688-1751) の2男。婚姻により Townshend 家と縁戚関係を結ぶ。Eton そして1739年 Oxford 入学。しかし、酒席に聖餐（式）の用意をしたというので放校処分となった。彼は Horace Walpole と Carlisle 伯の友人で、しばしば手紙のやり取りもした。1767年以降、White's Club と Jockey Club の会員となった。ウィットに富み、文学者としては二流、政治家としては将来を嘱望されたが実際には期待通りにはいかなかった。宮廷支持の閑職漁りだった。1740-91年貨幣鑄造所検査官、1753-91年 Barbados 大法官裁判所登録官、1783-91年王室御料地監督官主任—これらの職務は全て他の人々によってなされた。彼は、1780年4月6日の Dunning resolution (John Dunning 議員の、王権の影響力は弱められるべきである、という内容の議案で、下院で採択された決議) には反対投票した。そして1782年2月と3月に行われた賛否分かれた厳しい採決では5回全て North 側に投票した。彼の思典の要求は Ludgershall 選出の議員選挙を実質上自分がコントロールするという点に絞られたものである。1761年、Selwyn は Bute 伯にそうした2つの選挙の支配

権を申し出た。Bute は彼の申し出を受け、Thomas Whately と John Patterson の選挙勝利を確実なものとした。後年 North が同様の機会を得て、Selwyn はそれに関して出来るだけの事を全てやった。しかし、Selwyn が報酬を一人占めできたわけではなかった。Selwyn は、下院で「採決に加わる場合を除いては」彼と一緒に眠った振りをして、North の嗜眠状態振りを茶化したことが一度ならずあった。

(註41) Little Strawberry Hill は、Strawberry Hill と Teddington の間に位置する地所だが、Horace Walpole が手に入れた後 Clive 夫人に自由に住まわせていた。*Short Notes* 本文にも記してあるが、Kitty Clive は1785年12月6日に死去。
[R. W. Ketton-Cremer, *Horace Walpole*, 3rd ed. (Methuen, 1964), p. 138を参照されたい。]

(註42) Kitty Clive が1769年舞台から身を引いた後、1785年亡くなるまでそこに住んでいた。Horace Walpole は、彼女の住まいを Cliveden という愛称で呼んでいた。1787年冬には Mary & Agnes Berry に出会い、翌1788年から彼等の友情は急速に深まっていった。こうした状況の中で、Horace が故 Kitty Clive の Little Strawberry Hill の邸を愛する二人の姉妹に譲渡しようと考えたとしても然程不思議はない。1790年10月に Mary & Agnes 姉妹と父親は大陸旅行に旅立ち、その地に1年以上滞在することになるが、1790年10月12日付 Mary Berry 宛書簡の中で、'... I had my lawyer with me to prepare for securing Cliveden, if I should not have another almanac ; and he is to bring me a proper clause on Monday next.' と記しているの、彼等が旅立った後、法的なことも含めて譲渡の準備を始めたのではないだろうか。翌1791年11月 Berry 姉妹は帰国するが、Mary Berry のメモに次のような書き込みがある：“After winter between Florence and Pisa, return home in November, take possession of little Strawberry Hill.”
[Lewis Melville, ed., *The Berry Papers* (London : Bodley Head, 1914), pp. 23-24.]

(註43) Lady Ossory が Walpole からもらった最後の書簡は1797年1月15日付のもので、Walpole が亡くなる6週間前のものだが、Walpole 最後の書簡とされるものである。生涯数千通の手紙を書いた Horace Walpole の最後の書簡の相手が誰になるかということにはかなりの偶然性が含まれようが、それでも、結果的にそれが Lady Ossory 宛のものだったということには矢張り何か運命的なものを感じる。

